

日本古典と感染症

国文学研究資料館長 ロバートキャンベル



日本文学の大規模データベースを有する国文学研究資料館は、緊急事態宣言下の4月下旬、「日本古典と感染症」という動画をウェブで公開し、「反響を呼んだ。

社会全体で感染症を乗り越えてきた日本人の知恵について、ロバートキャンベル館長に聞いた。

記録されてきた不測の事態

—— コロナ禍において、経済状況の厳しさや医療体制の逼迫など、感染症をめぐる不安を日常に抱えています。そのようななかでは、

どうしても現在の状況にとらわれがちですが、日本には、古代から疫病に苦しめられながらも、それを乗り越えてきたという歴史があります。そこから学ぶことがあるのではないのでしょうか。

キャンベル 私はいま、感染症を通じて日本文学全体をとらえ直す、ということに取り組みはじめています。私の専門は、18〜19世紀の日本文学、そのなかで飢饉の際の記録である「救荒書」というものに注目しています。そのなかには感染症を題材にしたものがたくさんあります。もちろん、さかのばれば「伊

勢物語」や「方丈記」、「徒然草」にも感染症の影響がみられ、「万葉集」にも天然痘のことを詠った挽歌もあります。これまでも、自然災害や戦乱と同様に、感染症は非常に重要な歴史的転換点であり、文学発生の大きな原動力になることは専門家として認識していましたが、今回、身をもって思い知りました。

自然災害の多さが深く関係すると思われるですが、日本の古典文学には、さまざまな物事を細やかに観察し、記録してきたという特徴があります。例えば江戸時代の記録をみると、麻疹は20〜25年ごとに周期的に流行し



↑ 麻疹戯言 ↓



東京大学総合図書館所蔵

ています。残された記録から、どれぐらいの財産や人命が失われたか、どうすれば命を守ることができたかを知ることができるわけです。

時間と空間のディスタンス

——時代によって、解決策が異なる点、あるいは共通している点があるのでしょうか。

キャンベル 平安時代から中世まで、仏教とともに朝鮮や中国から伝来した医学の知識が共有されますが、祈りによって病から身を守るといった文化も生まれました。神社などの四隅に風鐸ふうたくがつるされるなど、邪気の侵入を防ぐためのさまざまな意匠、さらには宗教的な行事もありました。

近世になると、情報網が徐々に細かくなります。交通手段として街道が発達し、大きな紛争がないため、17世紀末頃から空間移動が格段に容易となり、人から人へと情報が伝播します。商業としての出版も発達し、活発な情報・消費社会が形成されるに当たって、麻疹やコレラ、天然痘の流行に関する記録や伝承についても、緻密になっていきます。

例えば、江戸時代の戯作者、式亭三馬は1803年、江戸を襲った麻疹について、「麻疹戯言」という書物を著し、さまざまな身分の人々が麻疹によって右往左往する姿、人のいなくなった街の様子などをパロディーとして描いています。それは、「飲むもの食べるもの、まるで味がしない。ひとりぼっちで体調が回復するまで12日間を指折ってふとんの中で待つ以外ない」といったような書きぶりで、病の経過や心理的な不安まで正確に観察し伝えているのです。

また、これは別の記録ですが、皮膚に疱疹の痕が残ったり、瘡かさができたりしたときに、そのメカニズムはわからないものの、風呂湯の中に酒を入れて体を消毒する儀式が記録されています。この儀式を複数回、時間をおいて行い、本当に治っているかどうかを確認したうえで、社会に復帰させるという知恵がありました。いまの私たちが手指の消毒を徹底し、感染の疑いがあれば無症状でも14日間は隔離するという同じことをして、経験則からディスタンスを取っていたわけです。

——現在の様子を記録したのかと思うような書きぶりですね。

キャンベル 江戸期の山村記録さんそんの研究者からは、こんな日記の記述を教えてもらいました。街道を伝って感染症発生のニュースが入ってくると、村長はすぐに村中に知らせて食料などを準備させて、人々が密集した村落から離散できるように計らい、各自が作った小屋に退避します。当時はもちろん「3密」という言葉を使いませんが、換気を良くし、密集した所から離れて、人との交わりをしない、そ

ういう密を避けることが、すでに江戸時代からあったわけです。日本で他の国よりも早く「3密」を避ける対応が浸透した理由は、歴史的な土台があったからではないでしょうか。各業界がそれぞれのガイドラインに沿って自分たちで律するという現在の形も、江戸時代からずっと続いている自衛手段なのです。

感染症は誰にでも 平等にやってくる

——いま、そうした歴史の延長線上にいる私たちには、どのようなことが試されていると感じますか。

キャンベル 19世紀の江戸という町は、世界一の人口密度を持つ都市空間でしたが、ロックダウンはしていません。ただ、飢饉や感染症の流行に際しては、「贅沢をするな」という御触書が出て、営業停止ではないものの、人々は劇場や遊廓には行きませんでした。江戸時代の戯作では、いつも羽振りよく着飾って偉そうに歩いている富裕層を登場させて、その人たちが顔面蒼白になっている様子につ

いて滑稽味をもって描いています。感染症は、私たちが平等に弱さを持っていることを突き付けてきます。その弱さを江戸時代の人たちは非常に細かく描くわけです。物語とはいえ、現実味のある話だったからこそ、当時の人たちがそれを見て、少し斜に構えた「笑い」という行為で客観視したのだと思います。

天保の大飢饉の直後には疫病が流行りますが、1830年代に書かれた「救荒書」の中に、飢餓で苦しむ人への施し方について説いている本があります。これは本当に胸を打たれるもので、例えば「食べ物を与えるときに、ぞんざいな態度で接しては絶対にいけない。食糧難、災難、病気などは天の成せる業であって、偶然あなたは運が良かっただけである」と。特に、苦しんでいる人と接するとき

に、人の真価が表れると考えられました。立派な刀を腰に差して歩いている侍のなかに、非常時に全く役に立たず、自分の保身だけを考える人もいます。そのような侍を茶化したり批判したりするのが江戸時代の文化でした。例えば、マスクを着けるか着けないか、リ



スクが高い場所に行くかどうかという一つの選択が、自分や家族を守るためでもあるのですが、直接は知らない人たちのための行動でもあるわけです。これは江戸時代の人々にとっては常識ともいえる感覚としてあった

と思います。いまの私たちが共有すべきことではないでしょうか。

「共有」が心の浄化への道筋

——自分や身近な人を守るだけでなく、知らない人たちをも守るために行動することが、江戸時代からの知恵であったことに改めて感動を覚えました。

最後になりますが、国文学研究資料館の取り組みについてお聞かせいただけますか。

キャンベル 資料館には2万タイトル以上の古典籍(明治より前に作られた本)と605点以上の歴史的記録資料が保管されていて、それを実際に手に取ってみるができます。

また、10年間に30万タイトルの画像を収める「新日本古典籍DB」を作り、オンラインで手軽にかつ無料でみられるよう、大規模なデータ集積や整備、国内外に向けた発信を行ってきました。

例年、大学共同利用機関として、春先は国内外からの利用者が多く訪れる時期です。その時期に緊急事態宣言が発出され、休館を余儀なくされたわけですが、そうした状況下でも、とにかく発信し続けることが私たちのミッションだと考えました。また、研究者だけでなく、例えば在宅勤務をしている人、学習機会が狭められている人などの幅広い方々に、さまざまなリソースを見ていただきたいと考え、4月下旬に、当館のウェブに「日本古典と感染症」という動画を日本語と英語でアップしました。日本独自の感染症に対する向き合い方、波が去った後のコミュニティの立て直し方など、もちろん現在の科学的知見のいまウイズコロナの時空を共有している世界に、日本固有の経験を開いていく必要があると思ったわけです。

人々が距離を置き、不安な状態に置かれているいまこそ、ノックされることがなかった扉を開いて一緒に歩んでいく。その必要性を、私たちが長らく扱ってきた日本古典の中から示され、導かれたように思います。

2020年7月14日 オンラインインタビュー

(聞き手) ソーシャル・コミュニケーション本部長 正木義久